

社会学部論集 第 48 号 (2009 年 3 月)

学 界 報 告

〔学 会 名〕

First ISA Forum of Sociology

〔参加セッション名〕

Comparative research on religious values
and symbolism

〔期 間〕

平成 20 年 9 月 5 日 (金)～9 月 8 日 (月)

〔場 所〕

バルセロナ大学 (スペイン)

世界規模の国際社会学会では IIS (International Institute of Sociology) と ISA (International Sociological Association) の 2 つある。このうち後者の ISA は歴史は前者の IIS より新しいが規模は大きい。そのために社会学の専門領域ごとに分化が進み、全体としての統合性が失われつつある。この欠陥を補うために ISA 内の各研究部会 (Research Committee) 同士の対話を復活し、共同研究を推進すべく計画されたのが今回の第 1 回 ISA 社会学フォーラムである。また、全体会議が 4 年ごとに開催され、その中間期に各部会の会議 (Interim Conference) がこれまで別々に開かれていたが、今回はそれを同時に行うということも本フォーラムの目的である。本大会のテーマは「So-

ciological Research and Public Debate」とされており、社会学研究の成果を広く一般の場で問題化するという目標も含まれている。

筆者は将来研究部会 (Futures Research: RC 07) のセッションに参加して発表した。RC 07 関連で 18 セッションが設定されていた。その大半が他の部会との共同セッション (Joint Session) である。例えば、第 11 セッション (The Internet: From utopia to nightmare) は RC 07 と RC 14 (Communication, Knowledge and Culture), RC 23 (Sociology of Science and Technology) との共同で、同一のテーマに各領域からアプローチするというものであった。

本フォーラムには ISA の全部の部会が参加したため、本会議と同様に規模が大きな会議となった。バルセロナ大学は諸施設が市内に点在しており個々の会議は複数の場所で開かれた。そのために全体としての統一が不十分で、ほとんどの参加者は開会と閉会の全体会議以外は、部分的な特定の会議にしか出席できなかった。規模の大きな国際会議にはこのような不備が必ず生じるもので、フォーラムの主催者のみに責任を帰することはできないであろう。IIS の国際会議がかつて神戸で開催されたが、これに次いで、次々回の ISA 国際会議は日本で開催予定である。

(丸山 哲央)

〔学 会 名〕

10th Meeting of the German – Japanese
Society for Social Sciences

〔参加セッション名〕

The Quality of the environmental includ-
ing the built environment

〔テ – マ〕

The Roles of Carbon-contained Materials
in the Sustainable Society

〔期 間〕

平成 20 年 8 月 28 日 (木)～8 月 31 日 (日)

〔場 所〕

ドイツ・オスナブルグ

本会議はドイツ・オスナブルク市において上記期間中に行われた国際学会である。オスナブルク市はウェストファリア条約という歴史的に有名な条約調印の舞台となったところで、国際的な平和都市を標榜している。今回の学会ではメインテーマに“Quality of Life & Working Life in Comparison”を掲げ、あらゆる方面からの QOL に関する研究の発表、活発な討論がなされた。セッションは 5 部門に分かれ、最後に総括を兼ねてパネルディスカッションが行われた。通常セッションの始まる前に、(1) Resource efficiency and Employment, および (2) Quality of Life & Working Life in Comparison という演題で 2 つのオープニングスピーチが行われた。ここではゲストスピーカーによる資源効率の考え方と、今後の雇用形態の在り方に関する展望と、主催責任者による本会議のメインテーマである QOL に関する様々な指標の紹介と説明がなされた。第 1 セッションは“The political and legal frameworks for quality of life & working life”というテーマでまとめられ、インターネットと民主主義の在り方の変容と市民活動との関連や、地方自治システムに関するオスナブルク市の事例研究、日独の軍事政策の比較、などに関する発表が行われた。第 2 セッションは“The economic dimension and factors”というテ

ーマでまとめられ、日独の労働市場の比較とフリーター問題、「アルバイト」と「労働」の語彙の視点からの概念比較、EU および諸外国における労働組合の国際的合意事項に関する研究、年長者の雇用状況および文化的影響度合いに関する日独の事例研究などが発表された。また第 3 セッションは“The Quality of the environment including the built environment”というテーマでまとめられ、自分の発表のほか、資源活用効率化に関する技術の日独協力の現状と可能性、地方レベルにおける持続可能な社会形成への挑戦、東京オリンピックに関する東京都市計画と住民意識、および西欧と東洋の都市形成の差異の比較などが取り上げられた。

第 4 セッションは“The cultural dimension”というテーマでまとめられ、日本における QOL とキリスト教、若年層の仕事と家族に対する意識の日独比較、留学生の日本適応に関する研究など、おもに文化的側面からの発表が取り上げられた。第 5 セッションは“The social dimension”というテーマでまとめられ、「二重性」や「外面性」などのキーワードであらわされるパラダイムシフトや日独の反原発運動に関する研究、離島の社会的持続可能性、「格差社会」における新しい下流に関する研究などが発表された。

最後にすべてのセッションに共通するキーワードである QOL や日独比較の立場など踏まえつつ、概念の再確認や論点の整理などが行われた。本会議では社会科学のあらゆるジャンルからの発表が行われ、QOL に関する多方面からの関心が伺われた。また学際的な討論の場であるゆえに、語彙の使われ方、研究手法の説明などにも活発な意見交換が行われた。総じて友好的に会議が進められ、会議の正式共通語である英語よりも、現地語であるドイツ語の方が、多くの参加者のニュアンス理解に役立つといった場面も多々見られた。結論として、「生活の質」をはかる客観的手法の確立が重要であることの認識が深められた。(林 隆紀)